様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０２８６

研究課題名（和文）日本的『ハムレット』翻案作品の研究―＜書き換え＞メカニズムの解明―

研究課題名（英文）A Study of Japanese Adaptations of Hamlet: the Mechanism of Rewriting

研究代表者
芦津　かおり（Ashizu, Kaori）

神戸大学・大学院人文学研究科・准教授

研究者番号：３０３４０４２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：日本で生まれた『ハムレット』翻案作品に焦点を合わせ、各々の翻案作品が誕生する際に、さまざまな要因――翻案者の個人的資質や事情、日本の文化的風土、社会背景、日本と西洋・イギリスとの関係性、思想的風潮など――が複雑に作用しあいながら「書き換え」メカニズムを形成し、翻案テキストを生成するさまを解明するとともに、そこで生まれた翻案が、原作に対して複雑で屈折した関係や態度（崇拝・模倣・反発・挑戦・揶揄など）を示すことを確認した。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the Japanese adaptations of the tragedy Hamlet, this research has examined the complex and dynamic “mechanism of rewriting,” in which so many various factors (such as Japanese social, economic, political conditions and cultural and ideological trends, as well as the adapter’s literary taste and talent, etc.) work together to shape the text of the adaptation. The research has shown that even when adapters seem to be taking an honorific and emulative approach to this world-famous tragedy, regarded as the epitome of Western modernity, their rewriting reveal, in complicated and often contradictory ways, a defiant, rebellious, or even vengeful attitude toward the canonicity and authority that the play represents.

研究分野：イギリス文学

キーワード：シェイクスピア　『ハムレット』　翻案　書き換え　日本　イギリス

１．研究開始当初の背景

シェイクスピア劇は過去数百年にわたり、世界中で多様なジャンルの無数の翻案作品（小説、劇、映画、オペラ、絵画、漫画など）へと「書き換え」られてきた。そうした翻案作品の研究は、国内外を問わず、今もっとも注目を集めるシェイクスピア研究の一領域である。日本で生まれた翻案に関しても、個々の作品を取り上げて原作との異同を確認したり、作品の価値や意義を論ずる研究が（主に日本人により）それなりに進められてきた。しかし日本のシェイクスピア翻案作品を系統的・体系的に捉え、とりわけ日本的な「書き換え」のメカニズムの全貌を明らかにしようとする研究はあまり見られなかった。

２．研究の目的

研究にあたり特に着目したのは、日本で生まれたシェイクスピア翻案作品が、原作に対して両義的（ときに多義的）な態度・性質を有する傾向である。もちろん「書き換え」という文学行為そのものが、そもそも相矛盾する性質を帯びていることは指摘するまでもない。翻案者がいかに崇拝的・模倣的な態度で原作に向き合ったとしても、やはり原作を「書き換え」て、自らが新たな作者になり代わろうとする行為自体が、原作者と原作を脱中心化し、その権威やキャノン性を転覆させようとする不遜で挑戦的な性質を帯びざるをえないからである。そして、そうした「書き換え」における両義的性質は、とりわけ日本におけるシェイクスピア翻案作品において、複雑かつ興味深い形で現れるように予想された。こうした関心に端を発する本研究は、日本に生まれた翻案作品を細かく検討することにより、各翻案化における「書き換え」のメカニズムをていねいに解き明かすと同時に、翻案が原作に対して、また翻案者がシェイクスピアに対して示す両義的・多義的な態度や性質を考察することを目的とする。そして、それまでに分析してきた、志賀直哉の「クローディアスの日記」、太宰治『新ハムレット』、大岡昇平『ハムレット日記』らの翻案小説や黒澤明の翻案映画『悪いやつほどよく眠る』について得られた知見と、本研究で得られる知見とを合わせることにより、日本的な「書き換え」メカニズムをより体系的・歴史的に把握することをも目指すものである。

３．研究の方法

本研究の対象は、数あるシェイクスピア作品のなかでも、悲劇『ハムレット』の翻案作品に照準を合わせることにした。日本における翻案作品の数が多いのもさることながら、同作品は、きわめて知名度が高く、世界文学の「最高峰」とも謳われることが多いだけに、それを書き換えようとする日本人に対して、おそらく「キャノン性」「西洋近代性」「権威性」といった資質をとりわけ強く感じさせるであろうことが予測されたからだ。研究の具体的手続きとしては、各時代に日本で生み出された『ハムレット』翻案作品（小説・劇・映画）のそれぞれについて、「書き換え」に作用したと思われる諸要素（翻案化の段階で日本の置かれていた政治状況、文化的状況や思潮的傾向、さらには各作家の個人的事情や資質など）を丁寧に分析・検討することにより、その作品のテキスト生成に作用したであろう「書き換え」のメカニズムを解き明かすというものである。それと同時に、さまざまな条件や状況を考え合わせることにより原作と翻案の関係性をも考察した。各事例の検討において、他の翻案例との比較を交えることで、できるだけ大きな歴史的視座からの考察を試みた。

４．研究成果

本研究で得られた知見を、次の六つの観点から略述する。

(1)本邦初の『ハムレット』翻案完結作である、仮名垣魯文『葉武列土倭錦絵』(1886 年)、および、その作を織田紘二がさらに書き換えたグローブ座公演台本(1991 年)の二作を、独立した文化的産物とみなし、二つの「書き換え」作業を分析した。明治という怒涛の文化的変遷期に生きた仮名垣が、去りゆく江戸文化を偲びつつ迫り来る西洋文化への「反発」として翻案に封じ込めた複雑な＜東西文化融合＞の要素は、織田の台本にも引き継がれてはいるものの、それは二十世紀末の日本演劇が置かれていた特殊な文化的状況のなかで「商品」として戦略的に選び出されたものであり、当時の状況において再補強・再構築されたものである点を明らかにした。

(2) 大衆作家・久生十蘭の二つの『ハムレット』翻案小説、すなわち「刺客」(1938 年)と「ハムレット」(1946)を取り上げた。とくに後者の時代背景（敗戦・GHQ による占領、検閲）が、久生の「書き換え」に深い影響を及ぼしているかに着目しながら、昭和天皇をめぐる政治的寓意を明らかにした。全体として久生は、本小説の書き換えを通じて、昭和天皇の受難と、その再生への祈りを語りだしている。久生の精妙かつ入念な書き換えにより、「ハムレット」における主人公の「再生」のドラマ――数十年にわたり演技と沈黙の生活を強いられ、命の危機に瀕しながらも、最終的にはアメリカの介入により命拾いをする――の背後には、戦時中は軍部により「現人神」としての演技と沈黙を課せられた昭和天皇が、戦後いったん生存の危機に瀕しながらも、アメリカの戦略により「人間」として復活させられるという、もうひとつの時事的な物語が生々しく浮かびあがるのである。それと同時に、久生が愛国心とコスモポリタニズムという、いっけん相矛盾するとも思える態度を織り交ぜながら『ハムレット』

の翻案化を行なった独自性をも指摘した。

(3) 終戦まもない 1949 年に宝塚歌劇団が上演した『ハムレット』における＜宝塚化＞の「書き換え」を、(1)フレーミング、(2)単純化とダミング・ダウン、(3)女性表象の書き換えと性的表現の清浄化、という三つの観点から詳細に分析した。全体として宝塚歌劇団は、きわめて謙虚で崇拝的な姿勢で原作に向かっているように思われるが、実際の脚本書き換えや演出形態をつぶさに考察すると、従来の宝塚方式を頑ななまでに踏襲し、むしろ原作を大胆に換骨奪胎してしまっていることが分かる。謙遜と崇拝の隠れ蓑をまといながらも、当時の同劇団が置かれていた状況の要請のために、シェイクスピアや『ハムレット』を「流用」しようとした点において、1949 年の宝塚公演は大胆でしたたかな作戦を取ったと結論づけることができる。

(4)堤春恵の翻案喜劇『仮名手本ハムレット』(1993 年)を研究した。堤のテキストの分析を通じて、彼女が翻案化を通じて「書き換え」ようとしていたが、悲劇『ハムレット』そのものではなく、むしろその日本的受容史のほうであることを示した。堤は、シェイクスピア悲劇とその受容史のユーモラスな「書き換え」をつうじて、過去に対する悔恨と歌舞伎への愛を表明するにとどまらず、二十世紀末の日本に対して鋭い批評的視線を投げかけている。つまり、二十世紀末日本においてあまりにも確立され、当たり前で「異質性」を失ってしまった悲劇『ハムレット』のあり方や、名作家として君臨するシェイクスピアの中心性・絶対性を相対化しつつ、この悲劇を生まれつき理解できる、楽しめると錯覚する日本人に、日本の演劇的・文化的ルーツやこれまでの受容の紆余曲折の道のり、さらには自分たちの受容のあり方をもあらためて考えさせることを論じた。

(5)夏目漱石『吾輩は猫である』(1905-6 年)における『ハムレット』の影響について考察した。同小説において漱石は『ハムレット』そのものの「書き換え」を行なったわけではないが、近代日本文学における彼の中心性や、彼がイギリス文学（シェイクスピア）から受けた深い影響を踏まえれば、日本の『ハムレット』受容を語る際に漱石を抜かすわけにはいかない。本研究では『吾輩』のテキストに『ハムレット』からの隠微でとらえがたい影響のあとを辿りつつ、それが次作『草枕』に流れ込む様子を分析した。とくに『吾輩』のなかの二つの溺死への言及―一高生・藤村操の投身自殺と、酔っ払って鉢に落ちる猫の最期―を手がかりとして、漱石の想像力や心象風景を辿った。漱石は、あえて『ハムレット』への直接的な対峙や言及は避けて、当時の社会や思想言論のなかに浮遊・沈殿している『ハムレット』/ハムレットをめぐる様々なイメージ、言説、観念などの断片を敏感にすくいあげ、それらを変形させたり、独自の皮肉や諷刺を加えたりしながら自作テキストに織り込んでいった。この世界文学の名作に平伏すのでもなく、真っ向から逆らうのでもなく、まさに「股倉から見」るかのように、異なるアングルから独自のアプローチを図ったといえよう。

(6)宗片（上田）邦義による『英語能ハムレット』の研究。シェイクスピア研究家でもあり、伝統能の実践者でもある宗片は、1970 年代からシェイクスピア悲劇『ハムレット』を英語能へと書き換え、それを上演する試みに着手している。彼は何度にもわたる書き換え作業のすえ、結果的にはずいぶんと短縮したバージョンに落ち着くことになる。本研究はまだ進行中であるが、宗片へのインタビューなども踏まえて彼の翻案化＝「能化」の特徴を分析するとともに、同時代（二十世紀末）のインターカルチュラリズム隆盛のなかでの彼の試みがもつ文化的融合の特質や、『ハムレット』翻案としての意義についても考えている。

全体を通じて、翻案化という行為のなかに、原作に対する崇拝や愛情と競合・反発などの両義的・多義的な態度が混在するという、研究開始当初に予想していた見通しを、具体的に裏づける結果が出せた。さらに、すでに完成していた、志賀直哉、太宰治、大岡昇平らの翻案小説や黒澤明の翻案映画についての考察と合わせて、より大きな規模と広い視座をもつ研究とすることもできた。

また、明治以降の急速な近代化により西洋の植民地化を免れつつも、いわば「知の植民地」として強い西洋崇拝・模倣の伝統を育んできた日本ならではの歴史的背景や、歌舞伎や能などの伝統芸能と、西洋演劇の模倣に端を発する新劇的分野とが拮抗・並存する演劇的環境など、様々な日本的な条件や特殊性が、『ハムレット』「書き換え」のメカニズムにも大きく影を落とし、作用していることをも明らかにできた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 芦津かおり、漱石の『ハムレット』の受容――『吾輩は猫である』の溺死を手がかりに、神戸大学紀要、査読無、43, 2016, pp. 17-33.

② Ashizu, Kaori, Grave Relation: *Hamlet* , Jyuran Hisao's 'Hamuretto', the Emperor and the War." *Cahiers Élisabéthains* 査読有、87, 2015, pp. 65-77.
DOI: **http://dx.doi.org/10.7227/CE.87.1.4**

③ 芦津かおり、ハッピーエンドの『ハムレット』――1949 年宝塚公演について、神戸大学文学部紀要、査読無、41, 2014, pp.53-74.
④ 芦津かおり、二つの『葉武列土倭錦絵』をめぐって――＜東西文化融合＞の背後にあるもの、*Albion*、査読有、58, 2012、pp.1-19.

〔学会発表〕（計　２件）
① 芦津かおり、堤春恵の『仮名手本ハムレット』と日本の『ハムレット』受容史、京大英文学会、2014.11.15、京都大学（京都府）。
② 芦津かおり、久生十蘭『ハムレット』(1946)の政治的寓意を読み解く、関西シェイクスピア研究会、2014.2.24,　近畿大学（大阪府）。

〔図書〕（計　１件）
① 芦津かおり（共著）、堤春恵の『仮名手本ハムレット』と日本の『ハムレット』受容史、日本シェイクスピア協会 55 周年記念論集（仮題）、査読有、2016, 印刷中。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
芦津　かおり　　（ASHIZU, Kaori　　）
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：３０３４０４２５

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：